

27年ぶりとなる宮古島でのツダナナフシの記録

砂川 栄喜

〒906-0007, 宮古テレビ株式会社, 沖縄県宮古島市平良字東仲宗根 968-9

はじめに

ツダナナフシ *Megacra tsudai* は、同属近縁種がフィリピンやニューギニア, オーストラリア, 台湾南部に生息する (沖縄県文化環境部, 2017) 広域分布種である。体長は 101~119 mm。日本国内では, 1989 年に西表島で初記録された (山崎, 1991)。当初は, 台湾南部などに生息しているツダナナフシとは別亜種のヤエヤマツダナナフシ *Megacra alpheus adan* とされていた。現在, ヤエヤマツダナナフシはツダナナフシのシノニム (synonym) とされている。日本国内では西表島, 石垣島, 宮古島に分布し, 沖縄県のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。

宮古諸島では 1998 年 8 月に宮古島城辺地区の新城海岸で初記録された (饒平名, 1999)。しかし, 饒平名の報告以降, 発見例はなく生息状況は不明であった。今回, 宮古島の 2ヶ所で複数個体のツダナナフシの生息を確認したので報告する。

調査

調査は, 2025 年 4~11 月まで実施した。饒平名 (1999) の報告に基づき, 城辺地区の新城海岸, 吉野海岸, 下地地区入江海岸を調査したほか, 宮古島, 伊良部島の海岸や海岸付近にあるアダン *Pandanus odoratissimus* L. f. について, 食痕の有無を調べた。食痕の調査は日中に行い, 満潮時の調査が難しい場所については干潮時に調査した。ツダナナフシのものと見られる食痕が確認できた場所について, 夜間に生体の確認調査を実施した。

結果

採集標本 1. MCM-N4-25004, 宮古島, 2025 年 5 月 14 日, 幼虫, 体長 56mm.

採集標本 2. MCM-N4-25005, 宮古島, 2025 年 9 月 12 日, 成虫, 体長 113mm.

【生息地 1】

2025 年 5 月 7 日の日中に成虫のものと見られる古い食痕を確認した (図 1)。5 月 7~14 日の午後 8~11 時に, 体長 35~56mm の幼虫 8 個体を確認した。確認個体は, 成虫のものと見られる古い食痕の周囲 2m ほどに集中していた。全ての個体がアダンの葉の裏側で見つかった (図 2)。1 個体を採集し 70% エタノールの液浸標本とした (標本 1)。証拠標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている。

成虫の出現を確認したのは 7 月 26 日 (個体 a, 図 3)。この後 8 月 2 日 (個体 b), 8 月 29 日 (個体 c), 9 月 11 日 (個体 d)、11 月 26 日 (個体 e) に計 5 個体の成虫を確認した。5 個体は全て葉の表側で見つかった。確認個体は一旦採集し体長を測定した。また, 個体識別のため触覚の撚れや体節など特徴調査を行った。その後, 採集時にとまっていたアダンに放逐した。

個体 a 体長 116mm

個体 b 体長 106mm

個体 c 体長 102mm

個体 d 体長 108mm

個体 e 体長 107mm

【生息地2】

2025年7月22日の日中にツダナナフシのものと見られる新しい食痕を確認した(図4)。すでに調査を開始していた生息地1の状況から成虫の出現はまだと判断し放置した。9月12日午後8時頃、成虫3個体を確認し(図5)採集した。採集個体は持ち帰り体長を測定した。採集した3個体のうち2個体は翌13日の日中に採集したアダンに放逐し、1個体は70%エタノールの液浸標本とした(図6、標本2)。証拠標本は宮古島市総合博物館に収蔵されている。採集個体の保管中に1個の卵を得た(図7)。卵は大きさを測定後、成虫を採集した場所のアダンの葉の付け根に戻した。卵の長径は約6.8mmだった。

個体 f 体長 112mm
個体 g 体長 113mm
個体 h 体長 106mm

ツダナナフシが確認されたのは生息地1, 生息地2ともに海岸近くのアダン林だった。饒平名(1999)の報告で目撃情報があった吉野海岸の発見者によると、当時の生息場所は断崖を下りた先にある駐車場脇のアダンや砂浜に面したアダンなど局所的だったという。来島した昆虫愛好者の要望に応える形で生息場所を教えた後、短期間のうちにツダナナフシの姿が見えなくなったといい、採集圧による消失の可能性は否定できない。今回確認した生息場所も局所的で生息状況は極めて脆弱と見られるため、生息場所の具体的な記述は控えたい。

写真



図1 成虫のものと見られる生息地1の食痕



図2 アダンの葉の裏にとまる幼虫



図3 アダンの葉の表にとまる成虫



図4 生息地2の食痕



図5 生息地2で見つかった成虫



図7 ツダナナフシの卵

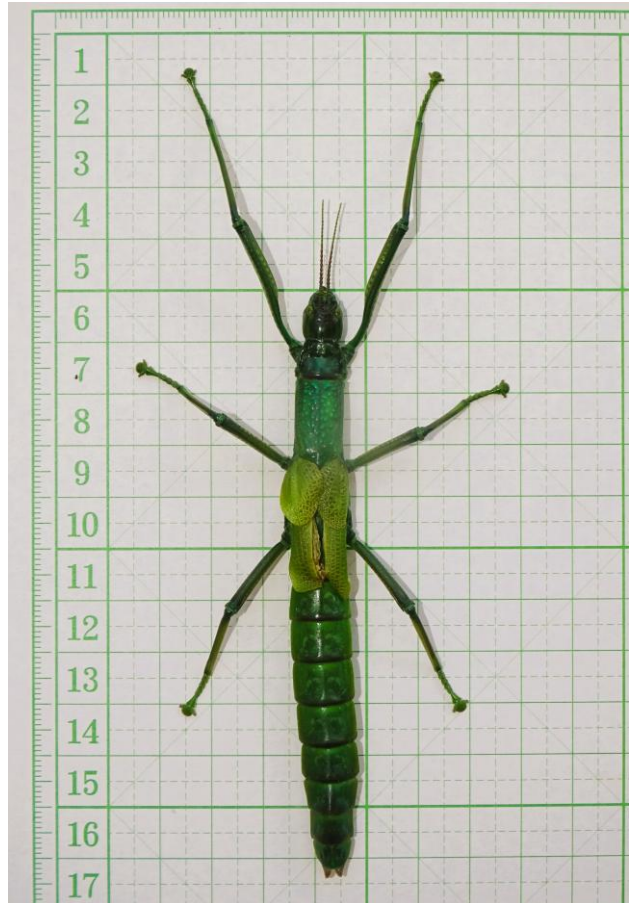


図6 証拠標本にした成虫

謝辞

宮古島市在住の平良恵秀氏, 川浦克彦氏, 新城定盛氏には過去の生息情報収集の際にご協力いただいた。長崎大学名誉教授で亜熱帯植物研究所の中西弘樹氏には生物の種子や卵の海流散布についてご教示いただいた。宮古島市総合博物館の湯屋秀捷氏には標本の収蔵に関してご協力いただいた。心より感謝申し上げます。

引用文献

山崎柄根 1991. 琉球列島西表島における *Megacrania alpheus* (ナナフシ目ナナフシ科) の発生. 日本動物分類学会誌 44 巻. 日本動物分類学会.

饒平名里美 1999. ヤエヤマツダナナフシの宮古島からの記録. 平良市総合博物館紀要第6号. 平良市総合博物館.

宮古島市史編さん委員会 2019. 宮古島市史第三卷自然編 第I部みやこの自然 本編. 宮古島市教育委員会.

宮古島市総合博物館 2013. 宮古島市総合博物館収蔵資料目録 自然資料編. 宮古島市総合博物館

中西弘樹 1999. 漂着学入門 黒潮のメッセージを読む. 平凡社.

小浜継雄・砂川博秋 2020. 宮古諸島産昆虫目録. 宮古島市史第三卷自然編 第I部みやこの自然別冊. (編) 宮古島市史編さん委員会. 宮古島市教育委員会.

沖縄県文化環境部自然保護課 2017. 改訂 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版(昆虫類) レッドデータおきなわ. 沖縄県文化環境部自然保護課.